

<b>Title</b>	巻頭言 現代における時間の質
<b>Author(s)</b>	阿久戸, 光晴
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.52, 2012.2 : 3-5
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4216">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4216</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 巻頭言 現代における時間の質

聖学院大学総合研究所副所長  
聖学院大学学長

阿久戸 光晴

日本の中世文学でしばしば登場する言葉に、「懈怠（けだい）」と「懶惰（らんだ）」がある。懈怠とは「今日やるべきことを明日に延ばすこと」であり、懶惰とは「今日ではなく明日やるべきことを今日やってしまうこと」である。この両者は、怠慢な時の過ごし方である。

一方、現代ドイツ児童文学の名作に、ミヒヤエル・エンデの『モモ』がある。あらずじは次のとおりである。大昔の円形劇場跡に住む、みすぼらしい身なりの女の子モモには不思議な力があつた。悩みのある人は、モモに話を聞いてもらうだけで気分が良くなりトラブルも解決していく（現代カウンスリングの役割?）。子どもたちはモモの近くにいるだけで楽しい遊びを考え出し、いつまでも楽しい充実時間を過ごせた。しかしその頃大都会では灰色の服を着た謎の男たちが現れ、巧妙な仕方の人々に働きかけ始めた。人々は「時間がない、時間がない」と口々に言い始め、この灰色の男たちに時間を盗まれていく。しかしこれら灰色の時間泥棒たちも、無心に遊ぶ子どもたちには手が出せず、時間を盗めない。真実を知ったモモは、すべての人々の時間を取り戻すため孤独な戦いを始める。

昨今、学生たちの学ぶ時間の確保を大学に義務づける動きが政府筋の諮問会議から聞こえてくるが、「時間」というものの本質を見誤っているとか思えない。時間は量的に長くも短くもなるが、質的に充実もし、容易に空虚にもなる性質を持つ。本質的課題は若人、否大人たち全員が率先して密度の濃い時間をいかにして持てるか対策を考察することであろう。

時間泥棒も無心で遊びに打ち込み時間の経過を忘れる小さな子どもたちには手が出せないと、この書は語る。「管理社会」から派遣される時間泥棒は、忙しい（心を亡くす）大人たちにはつけ入れても、無心（邪な心が無い）子どもたちにはつけ入れれない。なぜなら無心とは、感謝しエンジョイできる生を過ごす人間存在から生まれるからである。

中世日本文学者たちも現代の教育政策者たちに次のように言うのではないか。「今という時間を大切に充実させよ。今日取り組むべき課題を明日に延ばしてはならない、なぜなら今という時間を貧しくさせることであるから。また明日以降取り組むべき課題を今日取り組んではならない。なぜなら今という本質時間に異質な空虚時間を混入させることは一種の逃避であり、形式時間に時間そのものが変質してしまうからだ」と。近現代社会では、通常「懈怠」の克服は意識されてきたと言える。しかしもう一つの時間の課題である「懶惰」の克服をも意識し、現代人は、今日なすべき「時間の充実」すなわち聖書が語る「神の義と神の国を求め」時間の追究に取り組まねばならない。さらに時間の質の問題は、倫理の領域においても次のとおり重い課題を喚起する。

山上の垂訓の教えを基礎に打ち立てた倫理は主観的であり、近代化にあたっては文化価値を土台とした客観的倫理が要請されると一部で言われてきたが、ここにはそこに潜む重大な問題性が示唆されている。客観的目標到達型の生においては、しばしば今という時間が希薄化する傾向があるというこ

とである。今日というかけがえのない時間が、保証のない明日の奴隷になってしまふ問題なのである。そして現代人が目標を目指して何かに没頭していく際に、忘れられてはならない時間、あるいは生きるべき時間が先延ばしになっていく危機である。私たちは、あの中世文学者やモモとともに、充実時間の回復を目指さねばならない。私たちが生きる時間の質の問題は、アウグスティヌスも苦闘した課題である。

最後に、現代人に「充実時間」を与えることを目指すとしても、そのためには他動的に考察させても解決にはならないことを指摘しておきたい。その考察する側自身が、「充実時間」を満喫していないければならないであろう。あまりに多忙な（心を亡くしすぎる）存在からは、「充実時間」を学ぶ存在は生まれ得ないからである。本質的でない業務に束縛された現代の多忙の問題、それこそ克服されるべき「懶惰」の病状であり、この解明も当研究所の追究課題である。